
神子の想いは

霜月 雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神子の想いは

【Nコード】

N81570

【作者名】

霜月 雪

【あらすじ】

金の髪に銀の瞳。それを持つ者は神子だと、そう言い伝えられていた。

神子の少女、レイは、いつも神殿にやってくる青年、セキリを待っていた。

その時セキリは「神子に手を出した」と理不尽な罪をきせられ、牢獄されていた。

レイはセキリを助けることができるのか！？

『神子の願いは』の続編です。

前編（前書き）

短編、神子の願いは、の続編です。

別に神子の願いは、を読んでいなくても大丈夫だと思います。

前編

金の髪に、銀の瞳。

それを宿す者は、神子だと、

そう、言い伝えられてきた。

神子は、死なせてはならない。

大事に、大事に

誰にも、なににも、染められてはならぬ、と

世界が産まれてから、ずっと、ずっと、そう伝えられてきた。

少し古びた神殿しんでんは、今日も変わらず静かだ。響くのは、神官たちの足音だけ。ほぼ無音といえる空間に、神子と言われる少女は、木にもたれかかりながら、ぼんやりと過ごしていた。

少女、レイは知らずのうちにため息を吐いた。

最近、セキリがこない

つまらない毎日を、色鮮やかにしてくれた、青年の顔が浮かんでは消える。その青年、セキリはいつも仕事が終わるとこの神殿にきてくれるのだ。しかし、この頃姿を見ない。

「セキリ・・・」

そ、と名前を呼ぶ。しかし、答える声は、笑顔は、ない。唇を噛みしめて、レイは空を見上げた。

神子は、誰にも染められてはならぬ

「気分はどうだ？セキリ」

低い、楽しそうな声が、暗闇の牢の中に響いた。牢には鎖が出ていて、壁につながれている。その鎖をたどっていくと、暗闇でも光を宿す翡翠ひすいの瞳があった。髪は漆黒のため、闇に溶けている。

「最悪だ」

吐き捨てるように言って、セキリは目の前の青年、ルースを睨んだ。

「そうか、最悪か・・・」

くつくつと楽しそうに笑い、ルースはセキリを面白そうに一瞥いちへつした。

「お前が、悪いんだろう？神子に手を出すから」

「・・・レイに、そんなこと、しない」

明らかに怒気をはらんだ低い声が響いた。それすらも面白そうにルースは聞く。

「レイ、ねえ・・・ずいぶんと仲の良いことで」

笑い、セキリの首につながれた鎖を引っ張る。

「だけどなあ・・・お前がそう言っても、神官側はそう思わないみたいだぜ？大司教様なんかずいぶんとご立腹だし、国王なんて今にもお前を殺しそうな勢いだぜ？」

その言葉を聞き、セキリは目を見開いた。

「神子に手を出した　　お前、後7日で処刑決定だぞ？」

にや、と醜くルースは笑う。セキリは、俯いた。

セキリがこなくなったら、私、泣くから

いつしか、レイが言った言葉は、今も朽ちることなく、耳に残って

いる。

なあ、レイ

お前は、冗談のつもりで言ったと思う。それでも

俺は、嬉しかったんだ・・・

彼女が、そう想ってくれていることに。そう、言葉にしてくれることに。たとえ、本心じゃないとしても。すぐく、すぐ嬉しかった。

「・・・レイは、無事なのか？」

神子は、誰にも染められてはならぬ。そういう伝承だ。勘違いで、レイまで、罰せられるのかと思うと、償いきれない。

「神子様のことが？大丈夫だよ。神聖なる神子様にまで、罰なんて与えねーよ」

よりいっそう面白そうに、ルースは言う。いちいち癩に障る言い方だが、それを聞いて安心したようにセキリは息を吐いた。

自分がこの牢に入れられて、早三日がたった。

始まりは、仕事が終わった後、レイの所に行こうとしたとき、上司に呼び止められたことだ。

そのまま、王宮に連れて行かれた。

「セキリ・ノイズよ」

威厳に満ちた声が、耳朶にささる。深く首を垂れて、セキリは返事をした。

「貴様は、重罪を犯した」

その言葉に、耳を疑った。はじかれたように顔を上げ、セキリは困惑した声で王の問うた。

「国王様・・・今、なんと？」

「しらばっくれても、どうにもならぬ！貴様は今、王宮と教会を敵に回したぞ！生きてはいれぬと思え！」

それが合図かのように、扉から沢山の騎士が出てくる。そのまま、セキリは牢に入れられた。

セキリの監視役が、この青年、ルースと言っわけだ。

レイ・・・・・・・・

天井を見上げる。しかし、目には闇しか入らない。輝く金の髪が、脳裏に焼き付いている。

昨日も、今日も、セキリはこなかった。

いつもと同じの木に寄りかかり、レイは飽きず待っている。この頃、この神殿に来る神官たちがぴりぴりしている。いつもとは、少し足音が大きく、いらだっているようだ。時たま、木に寄りかかり、門を見つめているレイに、侮蔑ぶべつの目を向ける者もいた。

おかしい・・・

絶対に、何か変だ。

今まで神官たちは、自分にそんな視線を向けてこなかった。それなのに、なぜ。前までは、セキリが来ている時は、こんな視線向けてこなかった。飽きもせず待っている自分を、軽蔑けいべつしているのだろうか。

それでも・・・

銀の瞳を、また門に向ける。

「セキリ・・・」

ただ、側にいたかった。

それだけで、幸せだから。

彼自身の意志で、ここに来なくなったのならば。

その結果、彼が幸せになるのならば。それなら

たとえ自分の心が、想いが引き裂かれても、良い、と

そう思っているから。

セキリが牢につながれてから、5日の時が過ぎた。

前編（後書き）

初めまして、霜月雪です。

この話はぱっぱと完結する予定です。

中編

朝、日光が神殿全体に降り注ぐ。レイは、まぶしさに目を開けた。慣れたようすで、神官たちが部屋に入ってくる。そして、レイの衣服を取り替えた。レイのほうも慣れた様子で、されるがままとなっている。まだ重い瞼をこすり、レイは、初めて神官たちに声をかけた。相手を気遣うことは、このさい捨てる。

「セキリは・・・？」

声は、緊張で掠れた。

「来ません」

温度のない声が耳朵をうつ。レイは、目を見開いた。

「なぜ・・・？」

「あの者は、罪を・・・。あなた様もまた、罪を犯しました。これから先、この部屋からでないでください。あの男とも、逢ってはなりませんぬ」

レイは口元をおさえた。

罪？

セキリと、私が？

は、と気づいたように息を詰める。

『神子は、誰にも染められてはならぬ』

古い、古い伝承。

両手を祈るように握りしめ、レイは崩れ落ちた。身体が震える。ちようど着替え終わったらしく、神官はさっさと部屋を出てしまった。「それ相応の、罰だ」

扉が開かれ、閉じられる隙間に神官が呟いた言葉は、深く、深く、レイの心に突き刺さった。

違う

違う

彼は、なにもしていない。罪なんて犯していない。罪を犯したのは、自分、ただ一人だ。染められては、ならぬと。誰の色にも、染められてはならぬ、と。その伝承を破ったのは自分だけだ。彼は悪くない。自分が、彼に惹^ひかれただけ。彼といたいと望んだだけ。それだけだ。依存^{いそん}していた、自ら染まったのだ。

その言葉は、声にならなかった。

「明日だな」

ルースの声が、した。身体が酷く冷たい。床は塗れていて、手に力をいれて起きようとしても、滑るだけだった。昨日まで体中痛かったのに、今日は麻痺したのか、冷たいだけだった。指に、足に、力が入らない。

「どうだ、痛いかな？」

「・・・・・・」

楽しそうに問いかけるルースに暴言の一つでもかけたいが、それすら叶わない。喉から掠れた音がするだけだ。

「あと少ししか、お前は生きていられない。・・・嫌・・・」

鎖が引つ張られる。首に鋭い痛みがはしった。セキリは顔をしかめる。すぐ近くに、憎らしいルースの顔があつた。

「もう、死んでいるか」

そう言い、おもむろに腰にささった剣を出すと、ルースはセキリの腕を刃で軽くかすめた。かすめた箇所が熱を帯びる。短いセキリの悲鳴があがる。ルースは高らかに笑った。

「楽しみだなあ！明日が！お前は国王様の手によって、大司教様の前で死ぬんだあ！」

醜い声、が。

まどろみの中、セキリはただ一人の姿を、声を思い出していた。

セキリ……

もう一度、彼女に

名を、呼んでほしい、と

笑顔を、向けてほしい、と

痛切に想った。

レイは、寝殿の上でただ、ぼーとしていた。時たま庭を見、そして下に視線を映す。

なんで……

目頭が熱くなる。ただ、ただ、泣きたかった。泣こうと息を吸い込

むと、声がした。話し声だ。扉の前で座り込み、耳をつける。ときれとぎれだが、内容がわかった。

「あの男・・騎士の」

「ああ、あいつか」

「穢^{けが}らわしい、神子様^{けが}に手を・・」

「それを赦した神子様も、同罪だろう」

「嫌、違う。神子様は悪くない。悪いのはすべてあの男だ」

「そうだ。そうだ」

「どっちみち、あの男は今日、処刑されるんだろう？」

「清々する」

音が、消えた。呆然と、レイは息をつめる。

セキリが・・？

なんと、言った？

今日、処刑される

レイは、服の上着をおもむろに脱いだ。身につけているのは、白い、薄い服だけ。

音をたてないように、窓に近づく。窓を開け、踏み出した。

そこから先は、夢中だった。ただ、ただ走って、走って。王宮の場所くらい、覚えていた。神殿に入り、ある季節になると必ず神子は王宮にいていたから。

ただ、ただ走って。手が木ですり切れても、走り続けた。

鎖がはずされ、セキリは無理矢理立たされた。その瞬間激しい痛みが脳を貫く。声にならない悲鳴が上がる。

「こい」

手には新しい鎖がはめられている。痛みをたえ、セキリは歩き出した。

王のいる部屋に入る。王の周りには当然騎士と兵士がいて、セキリを睨んでいた。王の隣には、大司教が起立している。大司教はセキリを憎悪のこもった目で睨む。

「だせ」

王の、感情のこもっていない声と共に、セキリは押された。くずれるように王と大司教の前にくる。

「本来、大司教という地位は人の死に様を見ることはないが、致し方ない」

王の淡々とした声が、遠くのように聞こえる。剣の先をこちらに向け、王はセキリを睨んだ。

「貴様は重罪を犯した。セキリ・ノイズ。今、この場でその罰を」
剣が、振り下ろされる。それは、セキリの首をはねる、はずだった。

「やめて！」

凜とした声が、した。

騎士たちの怒鳴り声が聞こえる。

視界いっぱい、懐かしい、金が広がった。

中編（後書き）

更新です。

次の話、か、次の次で完結します。

後編

「やめて・・・！この人を、傷つけないで・・・」

悲痛な声が、室内に響いた。レイは、薄い白の衣服に身を包んでいたが、それはぼろぼろだった。顔は今にも泣きそうに歪んでいる。セキリは朦朧とする意識の中、のろのろとレイを見つめる。背中が暖かい。レイが、セキリを包むように抱いているのだ。抱く手は、震えていた。

大丈夫だ。大丈夫、レイ

だから、そんな顔、しなくていい

そう言いたいのに、声は出なかった。レイは、ただただ必死に、叫んだ。

「私は、確かに神子です・・・！だから、あなたたちの言う通り、神殿に閉じこめられた・・・」

目頭が熱い。声が震える。それでも、それでも。

「色のなかった・・・退屈だった毎日を、鮮やかにしてくれたのは、セキリです。あなたたちの言う通りに、これからもします。だから、この人だけは・・・この人だけは、奪わないで・・・」

最後の言葉は、レイがずっと思っていたことだ。産まれてから、ずっと、あの神殿に暮らしていた。親の顔も、どんな人かもしらない。神官たちとは話せないし、友人がいるわけがない。そんな退屈な、無色の毎日は、息が詰まるほど苦しかった。それを、鮮やかに、楽しいものにしてくれたのは、他でもない、今、レイの腕の中にいる青年なのだ。

大司教は、目を見開いた。国王は、話の流れについて行けず、ぽか

んとしている。

「お願いします．．！この人を．．殺さないで」

涙で濡れた瞳を真っ直ぐこちらに向ける少女に、大司教はひざまず跪いた。国王が驚いたように息を呑む。

「．．．．数々の非礼を、お許し下さい。神子様」

その声は、国王よりも威厳に満ちていた。祈るように手を合わせ、大司教は言葉を紡ぐ。

「わたくしたちは、伝承通りに、あなた様を神殿に閉じこめた．．。そのせいで、あなた様はずいぶんと苦しい思いをされたのでしょうか。それに今まで気づかなかった、愚か者に天罰をください」

顔を上げ、レイを見つめる。レイは、ただただ首を横に振った。

「そんなことは．．いいのです。お願いです。この人を．．」

次から次へ、瞳から涙がこぼれる。セキリの身体が冷たい。体中に、殴られた後や、かすり傷がある。

「．．．．なにをしている、騎士と兵士よ」

国王は、大司教と同じようにレイに跪き、周りにいる騎士たちをみやった。

「神子様の御前じげんなるぞ」

その言葉は、言うとおりにしろ、と言外に継いでいた。騎士たちは慌てて、レイの腕に気を失っているセキリを運ぶ。

「．．．．．彼、は．．」

掠れた声が、響いた。

「彼は、無事なの？」

大司教と国王は一つ、視線を交わして、頷いた。

「はい。この国の医療はだいぶ進んでおりますゆえ。．．．．まこと実に申し訳ありません」

また謝り、大司教はうなだれた。国王は、今にも気を失いそうだ。それほどにまで、神子は大切な、大切な存在だからだ。神子は、人であり、一番神に近い存在だからである。

レイは、安心したように、倒れた。

それから、月日がたち、あれから三年後。

大司教たち教会側は、神子の扱いを換えた。今まで話さなかった神官とレイは、だいぶうち解け、仲が良くなった。もともと神官は、神子であるレイと話したかったらしい。神官の数は、いままでとは大分減り、せいぜい、5人くらいになった。食事の世話などの係である。神官はすべて女だった。

「レイ様、お体が冷えますよ」

また、庭にでて、と頬をふくらませる神官、ミオに、レイは苦笑した。一番歳の近い神官は、このミオだった。

「ごめんね、ミオ。ここが落ち着くの」

そう言つて、レイは愁いを帯びた瞳を、門に向けた。それを見て、ミオは複雑な、罪悪感にとらわれた顔をした。

「……まだ、待つてらっしゃるのですか？」

「……ええ」

待つている人物、を思い浮かべ、レイは微笑む。大司教と国王が簡単に彼を自分の所へ行くことを赦すとは思っていない。それでも、この三年間、ずっと待ち続けた。

「言いたい、言葉が、伝えたい、想いを、まだ伝えてないから……」

「

彼が自分をどう思っているかなんて知らない。でも、自分は、誰よりも、なによりも、想っているから。それを伝えたい。

「セキリ……」

愛おしそうに呟くレイに、ミオはかける言葉を失う。おそろおそろ、名をよんだ。

「レイ様」

「レイ・・・っ！」

ミオの呼びかけは、違う、青年の声に遮られた。それは、待ち遠しかった、愛おしい声だ。

顔を上げる。

見慣れた、懐かしい漆黒の髪に、翡翠の瞳が、あった。

「・・・セ、キリ・・・？」

名を、呼ぶ。

「うん 遅れて、ごめん。レイ」

答えが、帰ってくる。

涙がこぼれた。

顔を見ていたのに、視界がぼやける。伝えたい思いがあるのに、声が出ない。

瞬間、抱きしめられた。視界に漆黒が広がる。暖かい。

「久しぶり、レイ」

想いが。伝えたい、想いが。言いたい言葉が。

「 待ってたのよ。遅いじゃない」

嗚咽の合間に、言葉を紡ぐ。セキリは苦笑した。

「ごめん・・・傷の深い所があつてさ。あと、国王様がなかなか赦してくれなかった」

やっぱりと笑う。

レイは、息を吸い込んだ。呼吸を落ち着かせる。言わなければ、いけないことがあるからだ。

「セキリ」

「ん？」

身体を離して、首を傾げる。その瞳を見つめ、レイは告げた。

「私、あなたのことが・・・」

そこで、言葉はとまる。突如、疾風が襲った。それでも、レイは言

う。

「好きよ」

その、言葉は。疾風でかき消されることなく、セキリの耳に響いた。目を見開く。が、瞬間、微笑みに変わった。

レイを抱きしめる。

「俺も、好きだよ」

これから、先もずっと、ずっと

レイは、目を見開いた。言葉の意味を理解する。目頭にまた熱が戻った。涙がこぼれる。

硬直していた腕が、確かめるようにセキリの背中に回る。そして、強く抱きしめた。セキリも、レイを抱きしめる腕に力を込める。

レイは泣いて、泣いて、そして、微笑んだ。

「ありがとう」

これから先も、側にいる、と。そう言って、セキリはレイの頭を撫でた。

古代からの伝承は

今

少しずつ崩れ、

神子に幸せを運ぶだろう

『神子の想いは』
END

あとがき

ここまで読んでくださり、ありがとうございました！

神子の想いは、完結です！

この話は、神子の願いはの続編です。前編で神子の願いは読んでなくても大丈夫とかきましたが、

読んでいたほうが話わかると思います……。すみません……。

なにはともあれ、完結できてよかったです！

神子の話はこれにて終了となりますが、案外短編とか書くかもしれ
ません。

神子の想いは、は、願いは、とは違い、ほのぼのイメージは捨てました。

もともと願いは、は、頭の中ではっと思いついたものだったのですけれど、

この続編を思いつきまして……。書くことに。

この話をよんだあとに、短編読むともしかしたら、おもしろくなるかもしれません。

。次にお会いする時は、もっと文章力つけてお会いしたいです……。

それでは、ここまで読んでくださった方々、本当に本当にありがとうございましたー！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8157o/>

神子の想いは

2011年9月29日14時31分発行